

口過剰に苦しむべき運命にある事を忘れてはならない。之を以つて之を見るに、人口問題は自然現象に非して人文現象であり、人の組織、努力、智能の相違は同一の自然状態にある國をして一は人口過剰を嘆ぜしめ、一は人口不足を呻たしめることがあることを思はしめる。(北岡)

アウエルハーン稿「高齢人口の

統計的研究」

Langlebigkeit als Massenerscheinung, von Dr. Jan

Auerhan (Prag), Allgemeines Statistisches Archiv

1940. H.3.

一

近代文明が死亡率、特に幼児死亡率を低下させ人間の平均壽命を延長したことは周知の事實であるが、併し平均壽命の延長は必ずしも人間が従来より長命になつたといふことを證明するわけではない。本論文はこの長壽命といふ特定の事象を統計的對象として取り扱つた稀しい論文の一つで、その集計方法の上にも一つの新機軸を見せてゐる。

蓋し従來この種の統計資料として興へられてゐるもの一つは普通に各國の人口調査に見られる年齢階級の集計だが、之が高齢者の特殊研究として不十分なことは高齢人口の總人口に對する比率が毎年の出生數や幼児

死亡率、或は移出入民の多寡に左右されることの尠くない事を考へれば明白である。そこで個別的な家系調査によつて之を試みたものもあるが、^(註1)又特に最高齢者を對象として調査せるものもある。^(註2)然しこの最高齢者年齢申告が極めて不精密なものであることは周知のことで、本論論者はこの種のやり方にも信を措いてゐない。

(註1) L. Vaucher, La Longévité dans les familles, 1896 in XI Band des „Bulletin de l'Institut International de Statistique“ (註2) Misajkov, Les centenaires en Bulgaire, 1929. „Die über 90-jährigen Personen in Bayern am 16 Juni 1925,“ 1927 in der „Zeitschrift des bayerischen Statistischen Landesamtes.“

右の如き難點を回避する爲に本論論者の採擇する集計法は高齢人口の割合を特に二十四歳以上の成年人口に對して求めることで、之によつて論者は毎年の出生數と幼児死亡率の多少による影響を免がれ得るとしてをり、更に六十歳以上の總人口に對する八十歳及び九十歳以上の高齢人口比率をも算出することによつて高齢人口の實相を更に精密に分析するのみならず、また之によつて移出入人口の影響をも回避し得るとしてゐる。なほ論旨は最高齢者を凡て九十歳以上の部に集計することはこの種高齢者の年齢申告の不精密を回避する所以だといつてゐる。

二

調査範圍は舊チエッコ・スロバキア國の諸地方であるが、本集計法を紹介する意味で特にボヘミア地方に關する集計結果(實數を除く)を擧げてみると次の如くで、

ボヘミア地方に於ける高齢人口百分比

年次	二十四歳以上 人口中六十歳 以上高齢者		六十歳以上人 口中八十歳以 上高齢者		六十歳以上人 口中九十歳以 上高齢者		八十歳以上人 口中九十歳以 上高齢者	
	男	女	男	女	男	女	男	女
一八六九	一五八	一四八	四七	四七	〇三	〇四	七三	七三
一八八〇	一八〇	一七六	四八	五一	〇三	〇四	五四	七三
一八九〇	一七六	一八八	五三	五三	〇三	〇三	四五	五八
一九〇〇	一七二	一九三	六九	七四	〇三	〇六	四三	七七
一九一〇	一六七	一九一	六三	七三	〇三	〇四	五三	五九
一九二一	一八一	一九三	五三	六三	〇三	〇三	四六	五三
一九三〇	一八二	一九四	六〇	七五	〇三	〇四	三九	四九

六十歳以上高齢者の對成年人口比率は一八八〇年以降漸減してゐるが、

之は特にこのボヘミア地方では保健衛生施設の向上により多數の子供が成年人口に加はつた爲で、一九二一年に激増するのは前大戦による成年人口の消耗によるはいふ迄もない。併し六十歳以上人口中の八十歳以上高齢者比率を男の場合に就いて見ると、一九一〇年まで總數も比率も不規則的にだが上昇してゐる。之は醫療施設の向上を物語るもので、戦時缺乏による死亡増で一九二一年に著減してゐるのを例外として、一九三〇年には再び以前の傾向に結びついてをり、一八六九年に比べると總數も比率も著増の跡を見せてゐる。所が更に八十歳以上人口中の九十歳以上高齢者の割合を見ると一九三〇年は一八六九年に對し著減の跡を示してゐて、前大戦の影響もさること乍ら同期間を通じての低下の跡は蔽ひ難い。所謂平均壽命の延長にも拘らず最高齢者は減少しつゝありとの論者の主張ある所以である。

又、一九三〇年の同地方の年齢階級別人口を一八六九年＝一〇〇とせる指數で表はしてみると次の如くで、

一九三〇年ボヘミア地方の年齢階級別指數

(一八六九年＝一〇〇)

年齢階級	男	女	全人口
二四歳以上	二五五	一六七	一八六
二五歳以上	一六七	一八一	一六八
二六歳以上	一八一	一七八	一七九
二七歳以上	一七八	一八〇	一八八
二八歳以上	一八〇	一八七	一九七
二九歳以上	一八七	一九三	二〇〇
三十歳以上	一九三	一九九	二〇二
三十一歳以上	一九九	二〇五	二〇四
三十二歳以上	二〇五	二一一	二〇八
三十三歳以上	二一一	二一七	二一四
三十四歳以上	二一七	二二三	二二〇
三十五歳以上	二二三	二二九	二二六
三十六歳以上	二二九	二三五	二三二
三十七歳以上	二三五	二四一	二三八
三十八歳以上	二四一	二四七	二四四
三十九歳以上	二四七	二五三	二五〇
四十歳以上	二五三	二五九	二五六
四十一歳以上	二五九	二六五	二六二
四十二歳以上	二六五	二七一	二六八
四十三歳以上	二七一	二七七	二七四
四十四歳以上	二七七	二八三	二八〇
四十五歳以上	二八三	二八九	二八六
四十六歳以上	二八九	二九五	二九二
四十七歳以上	二九五	三〇一	三〇〇
四十八歳以上	三〇一	三〇七	三〇四
四十九歳以上	三〇七	三一三	三一〇
五十歳以上	三一三	三一九	三一六
五十一歳以上	三一九	三二五	三二二
五十二歳以上	三二五	三三一	三二八
五十三歳以上	三三一	三三七	三三四
五十四歳以上	三三七	三四三	三四〇
五十五歳以上	三四三	三四九	三四八
五十六歳以上	三四九	三五五	三五二
五十七歳以上	三五五	三六一	三五六
五十八歳以上	三六一	三六七	三六四
五十九歳以上	三六七	三七三	三七〇
六十歳以上	三七三	三七八	三七六
六十一歳以上	三七八	三八四	三八一
六十二歳以上	三八四	三九〇	三八七
六十三歳以上	三九〇	三九六	三九三
六十四歳以上	三九六	四〇二	四〇四
六十五歳以上	四〇二	四〇八	四一〇
六十六歳以上	四〇八	四一四	四一六
六十七歳以上	四一四	四二〇	四二二
六十八歳以上	四二〇	四二六	四二六
六十九歳以上	四二六	四三二	四三四
七十歳以上	四三二	四三八	四三六
七十一歳以上	四三八	四四四	四四四
七十二歳以上	四四四	四五〇	四五二
七十三歳以上	四五〇	四五六	四五三
七十四歳以上	四五六	四六二	四五九
七十五歳以上	四六二	四六八	四六五
七十六歳以上	四六八	四七四	四七一
七十七歳以上	四七四	四八〇	四七七
七十八歳以上	四八〇	四八六	四八三
七十九歳以上	四八六	四九二	四八九
八十歳以上	四九二	四九八	四九五
八十一歳以上	四九八	五〇四	五〇一
八十二歳以上	五〇四	五一〇	五〇七
八十三歳以上	五一〇	五一六	五一二
八十四歳以上	五一六	五二二	五一九
八十五歳以上	五二二	五二八	五二五
八十六歳以上	五二八	五三四	五三一
八十七歳以上	五三四	五四〇	五三七
八十八歳以上	五四〇	五四六	五四三
八十九歳以上	五四六	五五二	五五四
九十歳以上	五五二	五五八	五六〇
九十一歳以上	五五八	五六四	五六六
九十二歳以上	五六四	五七〇	五七二
九十三歳以上	五七〇	五七六	五七三
九十四歳以上	五七六	五八二	五七九
九十五歳以上	五八二	五八八	五八五
九十六歳以上	五八八	五九四	五九一
九十七歳以上	五九四	六〇〇	五九七
九十八歳以上	六〇〇	六〇六	六〇三
九十九歳以上	六〇六	六一二	六一一
全人口	三三〇	三三〇	三三〇

論者は告げてゐる。

右の如き傾向はボヘミア以外の諸地方の集計結果に於いても夫々その特殊の變則的事情を考慮に入れれば一様に檢證されること^(註)で、之によつて本論論者は所謂平均壽命の延長にも拘らず最高齢人口は少くとも男子に於いては減少しつゝありとの結論を導くのである。

(註) 概して醫療施設の進歩せる地方では各地方とも六十歳以上高齢者の比率を高めて來てをり、屢々八十歳以上の其れにも及んでゐて、醫療施設の完備に怠だつたカルパト・ロシア地方と較べると其の數値も高いが、併し九十歳以上となると増加を止め、百歳以上に於いては著減してきてゐる。反之、九十歳以上の高齡人口比率に於いてはカルパト・ロシア地方が他地方よりも高い數値を見せてゐる。本論者は之を同地方の經濟的後進性に歸し、近代文明の人間生命に及ぼす影響の正反相反する二方向に讀者の注意を喚起してゐる。

三

また高齡人口を男女別に見てみると女の方が男より長命な事は各地方各

民族を通じて確認される。たゞスロバキア地方及びカルパート・ロシア地方のカルパート・ロシア(ウクライナ)人及びマジヤール人に(特に六十歳以上の高齢者の對成年人口比率に於いて)例外的現象を見るが、論者は之を前掲ミサイコフのブルガリア農村に對する同様結果の説明に倣ひ、之等の民族に於いては女子の社會的生活條件が男子に比し極めて劣悪なるが故なりとの意見に同意してゐる。その證據には之等の民族にあつても八十歳以上の比率を見るとやはり、女子高齢者の方が男子よりも多くなり、九十歳以上の比率に於いては更に顯著となることで、論者はこの事實を以つていよいよ女子の長命を其の自然的素質に歸するに足る證據としてゐる。尤もこの最高齡層に於ける女子の長命も同様に其の社會的條件によつて説明できないか如何かはなほ反問の餘地があると思はれる。

宗派別集計はさして我々の興味を惹かないがユダヤ人が各地方とも平均以上の高齢者比率を示してゐることが注目され、論者はこのユダヤ人の長命を同民族固有の遺傳的素質に歸してゐる。

ボヘミア地方に於ける宗派別高齢人口百分比(一九三〇年)

ボヘミア地方總計	二四歳以上人口中六〇歳以上者	六〇歳以上人口中九〇歳以上者	八〇歳以上人口中九〇歳以上者
	男	女	男
内イスラエル教徒	二四歳以上人口中六〇歳以上者	六〇歳以上人口中九〇歳以上者	八〇歳以上人口中九〇歳以上者
	男	女	男
方總計	一八二	一九四	六〇
内イスラエル教徒	三九	三四	五八

農業人口比率別の高齡人口百分比(一九三〇年)

農業人口(該當郡數)の比率

ボヘミア	二四歳以上人口中六〇歳以上者	六〇歳以上人口中八〇歳以上者	八〇歳以上人口中九〇歳以上者
	男	女	男
アウエルハーン稿「高齡人口の統計的研究」	二四歳以上人口中六〇歳以上者	六〇歳以上人口中八〇歳以上者	八〇歳以上人口中九〇歳以上者
	男	女	男
ボヘミア	一八二	一九四	六〇
アウエルハーン稿「高齡人口の統計的研究」	三九	三四	五八

なほボヘミア以外の地方に於ける同様の宗派別集計に於いては六十歳以上高齢者の對成年人口比率にイスラエル教徒が他宗派より低位にある處もあるが、併し八十歳以上の高齢者比率では依然として優位を示してをり、論者はこの事實をとつてユダヤ人の長命がその民族的衰亡(即ち成年人口の減退)の爲ではなく寧ろ民族的な素質に基くものであるとの自説をいよく固くしてゐる。尤も論者のいふ民族的素質なるものが後述職業別集計等に見られる言はゞ近代文明の影響の中での程度まで獨立の要因として作用してゐるものであるかを究明するには本論の所説はなほ聊か周密を缺くやうである。

婚姻關係別の集計で寡夫及び寡婦が有配偶者より遙かに高率を示してゐるのは當然だが、兩者を合せた結婚者總計を獨身者と較べてみると、八十歳以上では前者に高く、九十歳以上では後者に高い。とはいへ其の差は極めて僅少である。

四

最も興味の深いのは職業別集計で、たゞ高齢者が老後に多く恩給又は金利生活者となる爲に生ずる職業別集計上の困難を回避する爲め、本論者は農業人口の多少による地域別の集計法により次の如き高齢者比率を算出してゐる。

一〇%以内(二四)	一四・二	一六・五	四・四	六・二	〇・一	〇・三	三・四	四・三
一〇—三〇%(六九)	一七・九	一九・四	五・六	七・二	〇・二	〇・四	三・九	五・〇
三〇—五〇%(八八)	二〇・九	二一・四	六・九	八・二	〇・三	〇・四	四・〇	四・九
五〇—七〇%(四三)	二三・二	二二・九	七・五	八・五	〇・三	〇・五	四・五	五・五
モラビア及シレジア								
一〇%以内(六)	一七・八	一九・九	六・〇	七・七	〇・二	〇・四	四・〇	五・四
一〇—三〇%(三一)	一一・四	一五・二	三・八	六・五	〇・二	〇・四	四・七	五・九
三〇—五〇%(四八)	一七・〇	一九・五	五・四	七・〇	〇・二	〇・三	三・七	四・九
五〇—七〇%(二二)	二〇・六	二一・七	六・五	八・二	〇・三	〇・四	四・一	五・五
スロバキア								
一〇%以内(二)	二一・九	二二・八	七・六	九・二	〇・三	〇・五	三・八	五・八
一〇—三〇%(四)	一八・九	一九・六	五・九	七・三	〇・三	〇・五	五・八	七・三
三〇—五〇%(一〇)	一〇・五	一四・二	五・三	六・九	〇・三	〇・四	六・三	五・九
五〇—七〇%(三六)	一六・九	一九・三	五・六	八・〇	〇・二	〇・五	三・八	六・五
七〇%以上(二七)	一七・五	一八・八	五・八	七・五	〇・三	〇・六	四・七	七・六
カルパート・ロシア								
一〇%以内(二)	一九・四	一九・九	五・九	七・三	〇・三	〇・五	五・五	七・三
一〇—三〇%(一)	二一・四	二〇・九	六・一	六・九	〇・四	〇・五	七・〇	七・七
三〇—五〇%(一)	一七・五	一五・三	五・三	五・三	〇・四	〇・六	八・三	一〇・四
五〇—七〇%(六)	一二・五	一四・九	五・三	六・九	〇・五	〇・八	一〇・〇	一一・九
七〇%以上(六)	一〇—三〇%(一)							
	一七・七	一五・七	五・三	五・三	〇・四	〇・五	七・三	九・四
	一八・一	一四・八	五・二	五・〇	〇・五	〇・六	九・五	一一・四

之によると、ボヘミアでは六十歳以上高齢者の對成年人口比率は農業者人口比率と完全に對應してをり、青年人口の流出の多い關係上この數値から

直ちに結論を導くのは早計であるとしても、其の他の各項の數字も亦緩急の差こそあれ全く同様の對應關係を示してゐる。たゞ其他の地方では農業人口比率一〇%以下の所に却つて高い數字が見られるが、その理由の一つは高齢者の多いユダヤ人の都市集中の爲めであり(特にカルパート・ロシア

に著しい)、他は都市の養老院施設が高齢者の壽命を延長するばかりでなく、高齢者の都市集中を惹き起す爲めだと論者は解釋してゐる。

又、同じく農業人口比率によりボヘミア及びモラビアの兩地方を特に農・工の地域別に對立させて集計されたものは次の如くで、農業人口に高齢者の多いことはやはり極めて明瞭に看取される。

ボヘミア及モラビアの農工地域別・民族別の高齢人口百分比(一九三〇年)

郡	該郡當數	二四歳以上人口中 六〇歳以上高齢者		六〇歳以上人口中 八〇歳以上高齢者		六〇歳以上人口中 九〇歳以上高齢者		八〇歳以上人口中 九〇歳以上高齢者		
		男	女	男	女	男	女	男	女	
農業的諸郡 (1)										
チェック人主住郡 (3)	(五九)	二二・五	二二・六	七・五	八・九	〇・三	〇・五	四・一	五・四	
獨逸人主住郡 (4)	(二七)	二三・二	二三・六	七・三	八・七	〇・三	〇・四	四・六	四・八	
雜居郡 (5)	(九)	二二・九	二二・七	六・九	九・二	〇・四	〇・四	五・四	五・六	
工業的諸郡 (2)										
チェック人主住郡 (3)	(一九)	一三・六	一六・〇	四・六	六・三	〇・二	〇・三	四・一	四・七	
獨逸人主住郡 (4)	(三五)	一七・二	一五・五	五・〇	六・六	〇・二	〇・三	三・五	四・三	
雜居郡 (5)	(九)	一五・四	一六・九	四・七	六・三	〇・一	〇・三	二・二	四・四	
モラビア及シレジア										
農業的諸郡 (1)										
チェック人主住郡 (3)	(三二)	二二・三	二二・七	六・八	八・四	〇・三	〇・五	三・八	五・七	
獨逸人主住郡 (4)	(六)	二三・四	二三・九	七・六	九・二	〇・三	〇・四	四・三	四・二	
雜居郡 (5)	(六)	二二・〇	二四・〇	八・〇	九・九	〇・五	〇・六	六・一	六・五	

備考 (1)農業人口比率四〇%以上の諸郡、(2)農業人口二〇%以下の諸郡、(3)チェック人八〇%以上の諸郡、(4)獨逸人八〇%以上の諸郡、(5)其他の諸郡

尙、右の表中ボヘミアで獨逸人がチェック人より僅かだが高齢者比率に劣つてゐるのは論者によれば同地方のチェック人の農業人口比率が多少大きいからで決して民族的差異を物語るものではない。それは産業別人口比率の相等的いモラビア及シレジア地方では獨逸人はチェック人に決して劣つてゐないことで明白だとしてゐる。

職業別影響と關聯の深い都鄙別の影響に就いては次の如き集計が試みられてゐるが、

五

都鄙別の高齡人口百分比(一九三〇年)

地域	二四歳以上人口中 六〇歳以上高齡者		六〇歳以上人口中 八〇歳以上高齡者		六〇歳以上人口中 九〇歳以上高齡者		八〇歳以上人口中 九〇歳以上高齡者	
	男	女	男	女	男	女	男	女
ボヘミア	一八・二	一九・四	六・〇	七・四	〇・二	〇・四	三・九	四・九
ブラーク市	一一・九	一五・一	四・〇	五・八	〇・一	〇・二	三・五	四・三
人口一―五萬の四四 都市平均	一六・〇	一八・五	四・八	六・八	〇・二	〇・三	三・七	五・一
其他の市町村	一九・七	二〇・五	六・四	七・七	〇・二	〇・四	四・〇	四・九
モラビア及シレジア	一七・八	一九・九	六・〇	七・七	〇・二	〇・四	四・〇	五・四
ブリュン市	一三・六	一七・一	四・五	七・七	〇・二	〇・五	四・一	六・七
人口一―五萬の一七 都市平均	一四・八	一八・四	五・三	七・〇	〇・二	〇・四	四・八	五・一
其他の市町村	一九・三	二〇・八	六・二	七・九	〇・二	〇・四	三・九	五・三
スロバキア	一八・九	一九・九	五・九	七・三	〇・三	〇・五	五・八	七・三
プレスブルグ市	一〇・五	一四・二	五・三	七・二	〇・二	〇・四	四・四	五・四
人口一―五萬の一四 都市平均	一四・一	一七・一	五・七	八・三	〇・四	〇・七	七・六	八・三
其他の市町村	二〇・〇	二〇・二	六・〇	七・二	〇・三	〇・五	五・七	七・三
カルパート・ロシア	一七・五	一五・三	五・三	五・三	〇・四	〇・六	八・三	一〇・四
人口一―五萬の四都 市平均	一三・〇	一四・九	四・八	六・二	〇・五	〇・九	九・六	一四・七
其他の市町村	一八・二	一五・三	五・三	五・二	〇・四	〇・五	八・二	九・二

右表中六十歳以上高齡者の對成年人口比率を見ると小市町村の數字は都市に較べて皆一樣に高い。尤も青年人口の都市流入のある關係上都市の高齡人口比率の低くなるのは否定し難いが、移動人口の少い六十歳以上の人口に對する種々の高齡者比率に見てもボヘミアでは大體同様の事實が確認される。たゞボヘミア以外の諸地方では却つて都市に有利な數字が出てゐて、本論々者はこの變則的數字の理由を例へばブリュン市は其の市域中に廣大な農村地域を含んでゐるのみならず、又多數のユダヤ人が集つてを

り、カルパート・ロシア及びスロバキア兩地方にはユダヤ人の都市集中の著しい等の事實に求めてゐる。とはいへ之らの事由を考慮に入れても右の變則的數値は之を尙ほ全く釋明し難しと嘆じてゐる。

六

要之、問題究明の不充分と種々の説明上の困難とを承認し乍ら本論々者

の導く結論は次の如くである。

一、近代文明は正反相反する二様の作用をもつてゐる。其の保健衛生施設の進歩は確かに平均壽命を延長したが、併しその經濟的發展は却つて最長命者の數を減少させてゐる。言はゞ嘗て小數者の貴族主義的特權であつた長壽長命は大衆の間に平均化された民主主義化されたことになる。

二、職業別には新鮮な大氣の中で勞働する農業人口は工業人口に較べて長命で最高齡者も多い。

三、民族宗教別の集計結果は『種々の文獻に一再ならず言及されてゐる』長命素質の遺傳性を承認せしめるやうである。

四、女は男より長命で最高齡に達する者が多く、社會的生活條件の影響により六十歳以上高齡者の對成年人口比率では男より劣つてゐる場合に於いてさへ、更にそれ以上の高齡者比率を取つてみると女の方がより長命であることが確證される。(本多龍雄)

ウォルフガング・ヨブスト「結婚

貸付金制度の人口政策的効果」

Bevölkerungspolitische Auswirkungen der Ehestandsdarlehen; Wolfgang Jobst (Archiv für Bevölkerungswissenschaft und Bevölkerungspolitik 19 40 Heft 1)

ウォルフガング・ヨブスト「結婚貸付金制度の人口政策的効果」

ナチス政府の人口政策として採用された結婚貸付金制度 Ehestandsdarlehen は、出生率増加の上に可成の影響を及ぼしたものの如くであるが、

(註一)その統計的數字による舉證は餘り見られないやうである。いまその二三を示すに、(一)獨逸統計局の調査(Wirtschaft u. Statistik 1937)。一九三三年八月から一九三五年十二月までの婚姻並に出生數次の如くである、結婚貸付金を給付されたる五二〇、四五五の婚姻の出生兒、三〇七、三二〇、(但し死産を含む)結婚貸付金を給付されざる一、四八五、三三四の婚姻の出生兒五九六、五〇〇(死産を含む)。即、婚姻一〇〇に付き、貸付金を給付されたる婚姻の出生兒五九、給付されざる婚姻の出生兒四〇に當る。従つて出生の割合は一〇〇對六八である。(二)Schoppen の調査。(1935)Düsseldorf市、一九三三年八月から一九三五年四月迄。結婚貸付金を給付されたる三二〇〇の婚姻の出生兒一一七九、貸付金を給付されざる八〇〇〇の婚姻の出生兒一五二〇、(但し死産を除く)。即、婚姻一〇〇當りに付き、貸付金を給付されたる婚姻の出生兒三七、給付されざる婚姻の出生兒一九に當る。出生の割合は一〇〇對五一である。(三)Pavetti の調査(1938)。一九三三年八月から一九三七年四月迄、下ライン田舎地方の調査である。こゝでは、醫學的見地から結婚貸付金を拒否された婚姻と、貸付金を給付された婚姻との出生が比較されてゐる。貸付金を給付された一五八五の婚姻の生産兒一四九一、貸付を拒否された五九の婚姻の生産兒六五。婚姻一〇〇につき夫々、八〇及び一一〇の生産兒に當る。従つて出